第85回 全国教育美術展

全国審査員からひとこと

構図・フレーム設定

今年は様々な機材を利用して構図設定されている作品が高学年に目立ったように思います。主体としての描き手を中心にしてその周囲の空間の広がりをともなう実景と機材のフレームを通してみた映像では決定的な違いがあります。そして平面を平面に写すことと空間を平面に写すときの表現の違いは特にフレームワークに顕著に表れます。善し悪しの問題ではなく，そのことを十分理解したうえで，そしてネットリテラシーを意識したうえで指導することが重要です。

玉川 信一（全国教育美術展担当理事，筑波大学 名誉教授）

自由な精神と心の遊び

絵を想い描くことは，感じたこと，気づきや認識，身体の受容感覚に意識が向き，心や思考が投影されます。表現の方法も様々に素材の変化を感じ，解き放たれた自由な精神が自己表出する表現の基礎になります。湧きだした言葉に心の声が表現され，思いきった大胆な色や形もあらわれます。

好奇心や冒険的な探究心がめばえた「遊び心」は，自発的な思考をうみだします。心の遊びがあみだす生体リズムと自然環境が，自ら学ぶ意志や興味をつくりだします。誰でも自由な心をひらけば自分流の表現ができる，大人も子どもも障害があってもなくても感動を表現する力があります。

石丸 良成（東京造形大学 非常勤講師）

子どもの思いが透けて見える

子どもが題材と出会い，描きたくなった思いや描きながら膨らんでいったであろう思いについて，作品を通して数多く感じ取ることができました。それらの思いは，試行錯誤した重ね塗りの跡や筆跡，色の選択，構図の工夫，対象の捉え方等々あらゆるところに表れていました。きっと，図画工作科・美術科の授業や部活動において携わる先生方は，子どもに関わり，子どもの思いを大事にしながら適切にアドバイスや指導をされてきたのだろうと思います。

青田 伸一（国立大学法人福島大学附属小学校 副校長）

かけがえのない証し

形や色と向き合い，自分自身の「いいな」を大切に進む道を選んでいく。まるで旅をしているかのように自ら選択を重ね，夢中になって表現された作品は，子どもたち一人一人の心の地図であり，挑戦と発見の足跡なのだと思います。そこには，失敗を恐れず試した痕跡や，思いがけないひらめきに出会った瞬間の輝きが刻まれています。それは「この子はこんなふうに考え，感じ，歩んできたのだ」と伝える，かけがえのない証しです。

井田 善之（神奈川県横浜市立西寺尾小学校 校長）

その子の“今”の感じ方，表し方を大切に

先生との温かい会話が聞こえてくるような，安心してのびやかに線を走らせている作品に多く出会うことができました。ただ残念なことに，後から絵の具を入れたことによって，素敵な線が見えなくなってしまう作品も見受けられました。大人は立派（ダイナミック）な「作品」を求めがちですが，幼児期の表現はもっと素朴です。その子の“今”の感じ方，表し方を大切にすることが，やがては豊かな成長につながるのだと思います。まずは保護者の方々の理解を促し，担任の先生ご自身も安心して子どもたちと向き合える保育風土をつくれるといいですね。

伊藤 裕子（学校法人裕学園 谷戸幼稚園 園長）

シャウトする色彩たち

床に広げた何百枚もの特別支援学校の作品を見ていると，赤や黄色，青，黒，白といった混じり気のない原色が強く心身に沁み込んでくるときがあります。なぜ，この色彩たちはこんなにもまっすぐ輝いているのだろう。チューブから出したそのままの色やなぐりがきの線は，写実の技法や画法を凝らした作品の中では，稚拙な表現として排除されるものたちです。

しかし，そうした評価から解放された彼らは，あるがままの姿でシャウトし，ダンスし，私の心身を揺さぶります。そうした思いになったとき，私は彼らこそ私の先生なのだなあという気持ちになります。

金子 光史（アート工房「フェース of ワンダー」代表）

創造とはなにか

審査で子どもたちの絵を見続けるのは，計り知れないエネルギーを消費します。脳には疲労感さえあります。おそらく，脳内では文章を読み続ける活動よりも圧倒的に大きい情報を処理しているからです。しかし，のびのびと描かれた子どもの絵は，幸福感を与えてくれます。疲労感はあっても，感性は次の作品との出会いに向かいます。なぜなら，そこには豊かな創造の世界があるからです。創造とは幸福感を与えてくれるものです。

大坪 圭輔（武蔵野美術大学 名誉教授）

表現は新しい自分の発見

子供たちの表現や作品を見てみると，その作品の向こう側が見えてきます。子供たちがつぶやきながら，楽しそうに描く様子。画面は小さくても，きっと頭の中は宇宙規模に膨らんでいるのだろうと思います。「作品に生命を吹き込むことで，新たな意味や価値を創造し，そして新たな自分もつくっていく」そんな営みが繰り返される，造形活動は，まさに自分の人生を切り開き，未来を夢みて豊かな生活を創り出すことにつながると思います。

北田 尚雄（福岡県福岡市立愛宕小学校 校長）

価値観の変化に対する教育の立ち位置

時代における教育の役割は，最新技術に対応できる思考やその習得もあげられますが，逆に，変化する価値観の中で置き去りにされる内容に注目させることも，その時代にこそ必要な事柄と言えます。また，それらはすべての個人に内在する価値観の両極でもあり，そのバランス感覚こそ，次時代を生きるために欠かせない育くむべき能力です。例えば，結果に焦点化するAIを巧みに使いこなす手法ではなく，本人が試行錯誤しながら「制作」という行為を繰り返し，多彩な感情や技術と出会う最良の機会として図工美術があることに期待したいです。

加藤 修（千葉大学 名誉教授）

子どもの創造的な作品に触れて

創造性とは何か。私は，既存の要素・素材の新しい結合，新しい組み合わせであり，知的領域においての幸福感を得ることと考えています。今回初めてこの美術展の審査員として，幼児から中学生までの幅広い創造的な作品を，ワクワクしながら見させていただきました。改めて子どもたちの大人にはない創造性のすごさに驚きました。しかも，全国の発達段階の違う子どもたちの絵を，一度に見ることができ，自分自身とても勉強になりました。

桐山 卓也（東京学芸大学附属竹早小学校 教諭）

保育者・先生の関わりと子どもの表現

絵を描く子どもに関わった保育者や先生は，子どもが描き始める前と，描く過程と，完成した時に，それぞれどのような言葉がけや援助をしたのか想像しながら拝見しました。子どもたちの日常をよく知っている保育者・先生だからこそ，子どもの興味を捉え，思いを上手く引き出す援助ができたのだと思いました。指導者が過剰に関わるのではなく，そのときの子どもの素直な思いや感覚が，線，色，形となって現れている作品に出会うとうれしくなりました。

栗山　誠（関西学院大学 教授）

心の中ではじまるこどもの絵との心地よい対話

感じる心と身体から生まれる描画表現は，人間として本能的な営みです。こどもが描く行為は，人が自分で感じて生きていくことを獲得していく大切な姿です。大人は，こどもの描画表現から，豊かな本能的な感覚を発見し，大切な感性の存在を思い出します。ゆっくりと一枚一枚のこどもの描画を鑑賞し，まなざしを向けてみましょう。やがて心の中で，その描画との心地良い対話がはじまります。

照沼 晃子（関東学院大学 教授）

子どものことば・大人のことば

子どもが描くことを楽しむ絵，大人がぐっと誘（いざな）う絵，全国の教育現場から多くのメッセージを受け取りました。絵は，子どものことばです。絵には，大人のことば（手立て）も現れます。描くことは，子どもが自分で「感じて，考えて，表す意思決定の機会」でもあります。それは，作品を創ることを通じて「私」自身を創り出すかけがえのない時間です。その大事な経験を奪わぬよう，大人のことばは慎み深くありたいものです。

郡司 明子（群馬大学 教授）

映えをつかむ力

どう切り取ったらステキにみえるか。子どもたちは，見せたい瞬間や印象的な場面をつかむ感覚が鋭くなっているように思います。色や形を選ぶときの直感も軽やかで，心が動いた「推しポイント」を逃さず表現したいという意欲が，作品にユニークな魅力と活力を与えていました。こうした創意工夫を育む日々の豊かな活動の中で，子どもたちには，のびのびと描画に向き合い，その楽しさを広げていってほしいです。

中村 裕子（NHK コンテンツ制作局 第1制作センター〈教育・次世代〉チーフ・プロデューサー）

自分らしく表現できる子供の育成

この作品はどのようにして表されたのだろうと想像しながら審査に参加しました。一人一人が工夫を重ねてつくりだした作品には，かけがえのない価値があります。作品は，そのときだからこそ感じられることの記録でもあり，未来へ向けた夢や願いを詰めた宝箱のようでもあります。日本では，「うまくいくかわからないことに意欲的に取り組む子供，自分の考えをもつ子供や夢をもつ子供の割合が低い」ということが指摘されています。この課題の解決へ向けて，図画工作，美術は，どのように応えることができるか，先生方とともに取り組んでいきたいと思いを新たにしました。

小林 恭代（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

「表したいこと」を大切にする

今年も力いっぱい描いた子供たちの作品と出会うことができました。「どんなことを感じたり考えたりして描いたのだろう」と思いながら，それぞれの作品を見せていただきました。作品からは，対象や事象をじっくりと見つめて捉えた形や色彩の特徴や美しさ，身の回りの出来事や想像したことなど，表したいことを大切にしながら熱心に取り組んだ姿が伝わってきました。これからも子供たちが表したいことを見付け，様々な工夫ができるような授業実践が進んでいってほしいと思います。

平田 朝一（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

「その子らしさ」を大切に描かせたい

全国教育美術展の審査は，子どもたちの純粋な「思い」を絵から共有する楽しい時間でした。描く喜びや素材・技法そのものを楽しんでいる姿が想像できる作品や子どもだからこそ描ける独創的な作品に心を惹（ひ）きつけられました。発達段階を踏まえ，自分自身の発想や表したい思いに正直に向き合い，表現しているかを大切に観（み）させていただきました。指導者が「こう描こう」と示唆するのではなく，子どもの内側から湧き出る「その子らしさ」を大切にした指導をしていきたいと改めて感じました。

福田 美奈（鳥取県鳥取市立修立小学校 教頭）

美しさを発見する楽しさを

中学生の審査にかかわり，生徒たちの観察力と表現力のすばらしさにいつも驚きます。それぞれの作品表現の様子に思いを巡らすとき，生徒はどのような場面で美しさを感じるのでしょう。それは生活の中で何かを美しいと受け止める感性の高まりがあります。さらに，学生になぜ美術が好きになったかと聞くと，先生からの何げない褒め言葉や励ましの言葉が生徒の表現意欲を高めています。一人一人への言葉がけにも留意した授業研究も大切なことです。

松山　明（大阪芸術大学 特任教授）

学習と解放

素材に関する知識，制作に関わる技法や技量は，作品が「成る」ことを導く手立てですが，時にそれらは制作者の思考を奪い，自由を縛り，冒険を妨げる場合もあります。

このことをよく知っている指導者のもとで，子供たちは，他者によって導かれ（学び）つつも，自ら感じ自律的に考え，未知の世界に向かって身を投じ，何モノにも侵されることなく自由に遊ぶ（描く）ことができるのだと思います。

仏山 輝美（筑波大学 教授）

創意工夫の表現と，発見が生む時間

色や形への試行錯誤の末，「そうそう，こんな感じ」「イメージに近づけた」と，できた作品を眺められた子どもたちはきっと絵を描く喜びを獲得したことでしょう。そのような作品に数多く出会えました。絵の完成形や終着点が定まらない中でも無我夢中で表現に没頭する，そのひたむきな姿こそが，子どもたちの作品における最大の魅力と感じます。心動く瞬間を大切に，発見や感動に触れ，自分だけの表現で可能性を広げてほしいと願います。

森　有平（奈良県奈良市立あやめ池小学校 教頭）

「絵を描く」を問い直す

小学校学習指導要領では「絵に表す」活動を「描く」ではなく「かく」の表記が使われています。ここには，「絵に表す」活動を必須教育としてどう扱うのかという問いが投げかけられています。今回の審査では，描画材がもつ感触や抵抗が，子どもの思いやイメージの広がりをどのように導いているかに着目しました。物質と身体の相互作用から立ち上がる表現の領域が，これからの図工・美術教育に確かな位置を得ることを願っています。

堀井 武彦（児童造形教育研究会 運営委員）

子どもと教師とで紡ぎだす作品

思いがあふれる作品の数々に，感嘆の声を上げるばかりでした。一心不乱に作品と向き合っていた子どもが，ふっと顔を上げたとき，見守る授業者とまなざしが交差し，互いに笑みがこぼれている，そんな授業の一コマを思いながら絵を拝見しました。授業や造形活動を通して造形性を育もうとするとき，この光景は大事な不易なのだろうと思います。子どもたちの努力に見合う，学び続ける教師でありたいと強く感じさせられました。

渡邉 敏尚（新潟県新潟市立光晴中学校 校長）